

Character and Story

ボランティアは趣味でやっているような感じです。
人と人との繋がりができる。
それが楽しいと思ったのでしょうか。

北勢線の魅力を探る会

代表 近藤 順子 さん

北勢線の魅力を探る会代表

認定特定非営利活動法人みえきた市民活動センター常務理事

特定非営利活動法人いなべこども活動支援センター事務局長

ほかに 桑員バリアフリーの会代表

いなべ市在住

ボランティアへのきっかけを教えてください。

家族に高齢者がいるから、介護のことで役にたつと思って、登録ヘルパーをしました。

当時はその仕事の中で、やれることとやれないことが分かれていました。

例えば、ちょっとした買い物やちょっとした庭木の剪定はできなかつたのです。

そのときに、これでは不便だよねということになり、自分たちでできるように、ヘルパー仲間ボランティア団体を立ち上げました。

それがボランティアとか NPO に興味を持つきっかけとなりました。

その頃、三重県では、「特定非営利活動促進法」成立を受けての条例づくりを公開で行われていました。

NPO の勉強になるからと近所の方に誘われて参加しました。

その後、県の NPO 講座や男女共同参画セミナーなどに参加して、県内の様々な人とつながり、刺激を受けました。

そしてこの地域でも仲間がほしいなと思っていたら「平成の町割り会」というおもしろい団体と出会いました。そこからずーっとやってきたという感じです。

なにがおもしろかったのですか。

その場にいた人たちが熱かったんだと思います。

そしてフラットな関係で、普通の主婦の意見が通る会だったんです。そんなのあまりないじゃないですか。

普通の主婦が世の中のことに関わることって。

主婦だから昼間は時間があつたし、私にできることがあればという感じで。

みえきたの前身の活動で、インターネットラジオをしていて、取材先を探すのにアンテナを高くしていると様々なことが引っかかりました。それがおもしろいと思いました。

また「誰にでもできるマネージメント講座」を誰かが提案したんです。じゃあ、講座に参加したら教えてもらえるのかと思っていたら、いいえ、自分たちでやる。それぞれの関心があることを自分で企画運営する。そのこと自体がマネージメント力をつけることになる。そして、自分が関心を持って発信したことが、誰かに刺さってその誰かが関わってくれる。

そういうところがおもしろくてこの指止まれ形式でできたのが「北勢線の魅力を探る会」でした。



北勢線の魅力を探る会について教えてください。

近鉄が北勢線の経営を手放すことになり、その存続について市民の意見を聞くということで、会合がおこなわれました。3 回ほど参加しました。

2002 年三岐鉄道と周辺自治体とで北勢線の存続が決まりました。

このときに、自分たちで北勢線を活用してなにかできることがあるといいよねと 6 人ほど集まりました。

そこで話し合いを重ねて、結局沿線を歩くのがいいのではないかとまとめ、会を発足しました。

車で通ったら見過ごすものも、歩くことで見つけることができる。そんな感じで始めたのです。

メンバーには街歩きが好きな方や郷土史に詳しい方がいらしたので、史跡や神社仏閣を見て回ろうとなりました。

北勢線を存続させる意気込みだったのですね。

そんなたいそうなことじゃなくて、お客さんに少しでも北勢線を利用してもらうぐらいの感じでした。

私は長島町で育ちいなべに嫁いだので、北勢線を利用したことがないのです。

でも、北勢線がなくなると地域の方や私の子どもも困りますよね。

この活動でちょっとだけ、ほんのちょっとだけ貢献しているという程度で。それが続いているって感じです。

どのくらい続いていますか。

2003 年からなので、20 年ちょっとですね。

30 回までは春と秋の年 2 回。

その後は春のみで、今までに 35 回開催しました。

どこへ行くのかみんなで話し合う。

それが決まったら、みんなで下見に行く。

この下見が、メンバーが一番楽しめる時です。興味があるところで、じっくり観察したり、予定コースから外れて違うところを回ったりと、好き勝手できる。

時には、お寺の住職さんや関係者の方に話を聞いたり。ですので、本番よりも倍以上時間がかかりますが、みんな大満足なのです。

また、この下見のときにトイレ休憩をどこでするかも考えます。

これはとても大事なことなんです。

人数も当初は100人~150人だったからです。

今はもう引率のメンバーも高齢になってきたので、定員は50人です。

トイレ休憩を含めた立ち寄るポイントを決めて、時間配分を大まかに決めます。

当日配布資料にスケジュールを掲載するので、最終チェックは私がさーっと回って確認します。

チラシは前回の報告書と一緒に送っています。

報告書を送るのは、当日300円をいただいているので、主催者として自分たちに課したことです。

これが結果的にリピーターの参加に繋がっています。

桑名市の方の申込みが多いですね。



北勢線の魅力を教えてください。

なんととっても軽便でナロゲージということですよ。

日本で今運営しているのは3つ。

その1つが北勢線です。

西桑名駅から少し歩いたところで、北勢線、JR線、近鉄線のそれぞれの線路幅を見ることができません。

また、駅では馬道の駅には建築当時のままで残っています。柱には古いレールが使われています。

桑名市のほんぱくのときには、東員駅から15分歩いて北大社車庫を見学させていただきます。

そして、楚原駅で降りて「めがね橋」と「ねじり橋」を見に行きます。

終点の阿下喜駅には、軽便鉄道博物館があり、ターテーブルや古い車両を見ることができます。

復元された旧阿下喜駅も見逃せません。

最後に近藤さんの性格を教えてください。

問題があつたらそれから考えればいいやという性格です。

土壇場にならないとやらない、楽観的です。

だって、ボランティアですからどこからもお金が出ない。

そのうえ事務的なことは面倒なことが多いです。

でも、最終的に達成して楽しければそれでいいと思っています。一応説明責任はあるので、そこだけは押さえて。

継続の秘訣？楽しくやる、できないことはしいです。

インタビューを終えて

「ざーっと」「ささーっと」「大まかに」
近藤さんはインタビューの中で大げさではないとか、たいそうなことではないということ、こういう言葉で表しました。でも、彼女を知るスタッフは、実はとても丁寧にやっていることを知っています。

多くを話さない近藤さんに、今回いろんな角度から質問しましたが、上記の形容詞で答えるのでとても困ってしまいました。

そしてインタビューの最後に「うちの会も北勢線がなくなればやめられるね」と言いながらも「とりあえず北勢線がつづく限り」

気負いのない言葉とは逆の行動をされる近藤さん。このことが伝わるというなあと思うのです。

今回で、市民活動団体の代表を取り上げるシリーズは、一旦お休みします。

次回からの活動ニュースをお楽しみに！

ズートピア (2016年)

市民活動はしばしば「正しいことをしている」という自己像を思いこんでいます。しかしズートピアが映し出すのは、「正しさこそが分断を加速させる瞬間がある」という不都合なことを暗喩しています。

『ズートピア』は、肉食動物と草食動物が共存する理想都市を舞台にしたファンタジーです。しかしその裏には、現代社会の差別、分断、権力、そして「恐怖による統治」という冷徹な分断につながる構造が感じられます。

「多様性を掲げる社会が、簡単に不寛容へ転落するか」を表しています。物語は「捕食者が突然凶暴化する事件」です。これはテロや犯罪、感染症、社会不安といった“説明不能・理解不能な恐怖”のこともかもしれません。

私たちは原因が不明なまま、「危険なのは誰か」という単純な二分法、誰が悪いかに飛びつきます。

草食動物は肉食動物を疑い、肉食動物は自己検閲を始め、社会全体が相互監視の空気に包まれていきます。この構造は、9.11以降の安全保障国家、パンデミック下の排除、移民問題におけるスケープゴート化など現実社会ととても似ているかもしれません。

ズートピアが掲げるスローガン「誰でも何にでもなれる」という理想です。多くの場合は「参加できる人だけが参加する構造」になっています。

映画でも、警察官になれたのは例外的に優秀で粘り強いジュディだけです。

制度は開かれているように見えて、実際には参加コストを個人に押し付けています。

これは市民活動で頻発する「やる気のある人に負担が集中する構造」と同じです。

しかし彼女自身も無意識の偏見を内包しています。ニックに対して「本能的に危険ではないか」と疑う場面は、善意の側にいる人間ほど差別を再生産してしまうという逆説を突きつけます。

ズートピアの問題は、露骨な差別主義者よりも、「自分は差別していないと思っている多数派」の中に潜んでいます。

肉食獣が悪ではなく、弱者の象徴とされる草食動物が問題です。

これは「被害者側、位置」にいる者がそのまま道徳的正しさを保証しないことを示しています。

彼女は恐怖を政治資源として利用し、秩序維持と権力獲得のために分断を意図的に設計する。

つまり『ズートピア』は、善悪の対立ではなく、彼らは「安全のため」「子どもを守るため」「万が一に備えて」という正義の言葉で排除を正当化します。

市民活動でも同じ構図が起きます。

「トラブルを避けるため」「責任が取れないから」「リスク管理のため」という理由で、新しい参加者や異質な意見が排除します。

その結果、組織は安全になる代わりに柔軟性と外部との接続を失います。

「恐怖を管理する者が社会を支配する」という構造そのものを告発しているかもしれません。

市民活動が「正義ポジション」に依存しすぎる危険性も示しています。

「弱者支援」「市民の声」「当事者性」という言葉は本来重要です。

それ自体が免罪符になると、批判不能な権力に変わります。

正しさを名乗った瞬間に、チェック機能が停止する構造は、現場で多く見られます。

生態に合わせた区画は多様性への配慮であると同時に、分離の固定化でもあります。

表向きは合理的ですが、そこには「住み分け」が常態化します。

多文化共生の名のもとで、実は交流が減り、ステレオタイプが温存される現象と重なります。

ニックの存在は、制度から排除された者が「どうせ信じられないなら、悪役を演じた方が合理的だ」と学習してしまう社会的自己成就予言をしているかもしれません。

差別は被差別者の行動まで変え、結果的に偏見を証明してしまいます。

この負の循環を断ち切る鍵として描かれるのが、ジュディとの相互承認である。

正義は制度だけではなく、関係性の再構築から生まれるということをいっているのでしょう。

『ズートピア』は、「多様性を掲げるだけでは共生は成立しない」という現実を突きつけます。

必要なのは、偏見が生まれる構造を疑い、恐怖を利用する言説に抵抗し続ける市民的成熟である。

ズートピアは遠い動物の国ではありません。

私たちが生きている都市そのものの、現実の鏡かもしれません。